

Learning for Sustainability

2005年日本国際博覧会

地球市民村

NGO Global Village

持続可能な社会へ向けて 世界からNPO/NGOが集う

NPO/NGOの参加に向けての「地球市民村」説明用資料

愛・地球博の概要

<http://www.expo2005.or.jp>

21世紀初の国際博覧会が、2005年に愛知県で開催されます。

地球規模の課題解決に向けて

愛・地球博は、21世紀の人類が直面する地球規模の課題の解決の方向性と人類の生き方を発信するため、2005年3月25日から185日間、名古屋東部丘陵において、開催されます。

テーマは「自然の叡智」(Nature's Wisdom)

「自然の叡智」を縦糸に、「地球大交流」を横糸に展開される愛・地球博。「自然の叡智」(自然が有している素晴らしいしくみ、生命の力)に学んで創る新しい文化・文明の在り方と、21世紀の社会モデルを、世界中の人々との多彩な交流を通じて実現することを目指します。

会場を構成するふたつのゾーン

会場は、世界から智恵と楽しさが集い、地球大交流を体感する賑わいのゾーンである「長久手会場」と、自然との共生をカタチにする市民参加のメモリアルゾーン「瀬戸会場」のふたつのゾーン(合計173ha)から構成されます。

第3のエンジン「NPO/NGO・市民」

これまでの国際博覧会は、20世紀前半は「国家」が主役、後半は「企業」が中心に展開してきました。さらに、今、21世紀の新しい国際博覧会である愛・地球博は、地球社会を構成する第3のエンジン、「NPO/NGO・市民」の参加がとても重要になってきています。

*NPO = non-profit organization、民間非営利団体

*NGO = non-governmental organization、非政府組織・民間の国際組織

協会企画事業「地球市民村」

「遊びと文化のゾーン」にある「地球市民村」は、このような愛・地球博のテーマを具現化する場として、国際的に活動するNPO/NGOが集まり、「持続可能な社会」に向けての学びのプログラムを展開する場です。

愛・地球博の全体概要

名称	正式名称	2005年日本国際博覧会
	略称	愛知万博
	愛称	愛・地球博
テーマ		「自然の叡智」
サブテーマ		1.宇宙、生命と情報 2.人生の“わざ”と智恵 3.循環型社会
開催期間		2005年3月25日～2005年9月25日(185日間)
開催場所		名古屋東部丘陵(長久手町・豊田市・瀬戸市)
目標入場者数		1,500万人



MAP



『長久手会場』
会場拡大図



センターゾーン

「愛・地球博」のテーマと魅力を伝え、地球大交流を具現化する求心力のある賑わいのステージ。宇宙の誕生から今日の地球までの壮大なドラマを展開する「グローバル・ハウス」、こいの池-ナイトイベント「こいの池のイブニング」、そして最先端の映像IT技術を駆使して世界中の人々につながる「愛・地球広場」から構成される。

遊びと文化のゾーン

「地球市民村」・「コンベンションホール」・「食と遊びの事業」



*長久手会場からシャトルバスで北東に15分

瀬戸会場

「市民交流プラザ」「交流広場」がある市民参加ゾーン。市民参加ゾーンは、世界中の市民や市民団体が地球社会の課題に対して、ひとつになってチャレンジする本格的な市民参加のステージ。「里山の自然と歴史を体感する」里山遊歩ゾーン、瀬戸会場「政府館」や「愛知県パビリオン」の国・県出展ゾーンに分かれている。

民間出展ゾーン

電気事業連合会、トヨタグループ、東海旅客鉄道(株)、(社)日本ガス協会、三菱グループ、日立グループ、三井グループ、(社)日本自動車工業会、(以上単独館)、(株)中日新聞社(共同館)がパビリオンを出展し、個性豊かにテーマ展開。

グローバル・コモン

公式参加国や国際機関が集い、大陸を基本とした地域別の構成で6つのステージに分かれている。

グローバル・ループ

自然の地形に適するように配置された6つのコモンを結ぶ、全長2.6kmの回廊型メインルート。1時間ほどで一周できる。(バリアフリー)

日本ゾーン

長久手会場「政府館」・「愛知県パビリオン」・「名古屋市パビリオン」

森林体感ゾーン

愛知県の公園整備事業と連携し、美しい水辺景観を活かした、樹木、草花、鳥、昆虫などにふれあえる場。



地球市民村の概要

愛・地球博のテーマを具現化／コンセプトは「持続可能性への学び」／参加体験学習のプログラムを展開／日本と海外のNPO/NGOの協働参加／「国連持続可能な開発のための教育の10年」と連携

愛・地球博のテーマを具現化

地球市民村は、「自然の叡智」を縦系に「地球大交流」を横系に展開される愛・地球博のテーマを具現化し、21世紀の人類が直面する地球規模の課題の解決に向けて、学びと交流を繰り広げます。

コンセプトは「持続可能性への学び」

環境、開発、平和、人権、教育など、様々な課題が複雑に絡み合う中で、「持続可能な社会づくり」が地域から世界の課題になっています。地球市民村では、「持続可能性への学び」(Learning for Sustainability)をコンセプトに、様々なNPO/NGOが独自の取り組みや教育プログラムを紹介します。

参加体験学習プログラムを展開

会場には、年齢や関心も様々な一般の人々が大勢来場します。どのような方でも楽しみ、かつ学びや感動がある「学習」プログラムが求められます。NPO/NGOの方々には、「参加体験型の学習プログラム」を磨いて、あるいは開発して展開していただくことを期待します。

日本と海外のNPO/NGOの協働参加

日本のNPO/NGOをホストに、海外のNPO/NGOをパートナーに、ユニットで参加していただくコラボレーション参加を原則としています。参加団体は、「自然・環境」と「国際交流・協力」の活動分野を中心に、広く「持続可能性」に取り組む団体です。基本は1カ月交代。毎月10～12団体、会期を通して60団体以上の参加を想定しています。

「開発のための教育の10年」と連携

日本が提案して国連で採択された「国連持続可能な開発のための教育の10年」が2005年から始まります。

国際機関や関係省庁、NPO/NGOなどの動きとも連携し、一過性でなく事後に成果が継承される催しを目指します。

KEY WORD 「持続可能な開発のための教育」とは?

1. 持続可能な社会をつくる上で、技術革新や制度改革と並び、意識改革につながる教育の重要性が指摘されてきました。
2. ユネスコ(国連教育科学文化機関)は、「持続可能性」とは「環境だけでなく貧困、人口、健康、食料、民主主義、人権、平和、道徳・倫理、文化的多様性、伝統的知識なども含む」としています。

主催者月別テーマ(案)

持続可能性に関わる多様な分野を考慮し、「人と自然」(環境)と「人と人・社会」(開発)の二大分野にしばり、各3つ、計6つのテーマを設定し、参加NPO/NGOの協力を得ながら映像やシンポジウム、パフォーマンス、コンサートなど、月間テーマを具体化するプログラムを行う予定です。

注:月間テーマに合わせてNPO/NGOの参加編成を行うわけではありません。

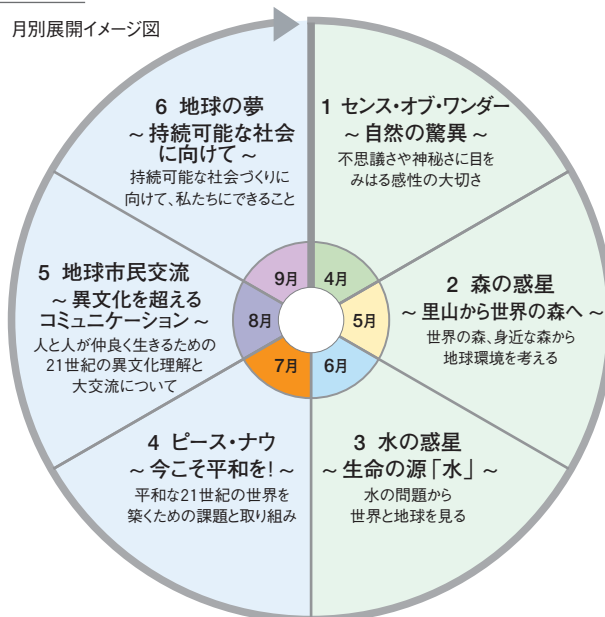
実施概要

名称	「地球市民村」 "NGO Global Village"
コンセプト	「持続可能性への学び」 "Learning for Sustainability"
コミュニケーションワード	「地球の夢」"Earth Dreaming"
参加NPO/NGO数(予定)	毎月約10団体、会期計で60団体以上
開催期間	2005年3月25日～2005年9月25日

組織形態

事業主体	財団法人2005年日本国際博覧会協会
実行組織	地球市民村事務局
アドバイザー・プロデューサー	木幡 和枝(東京芸術大学教授)
協賛企業等	株式会社損害保険ジャパン トヨタ自動車株式会社 富士通株式会社 連合・労福協万博センター ※新規協賛企業募集中

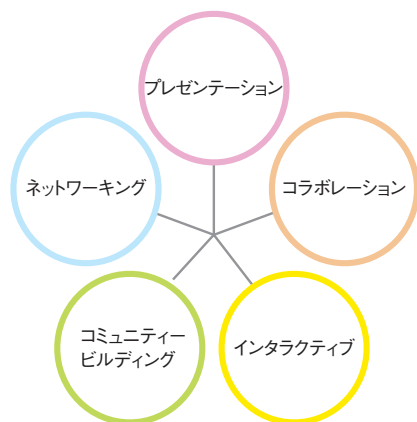
月別展開イメージ図



5つの指針

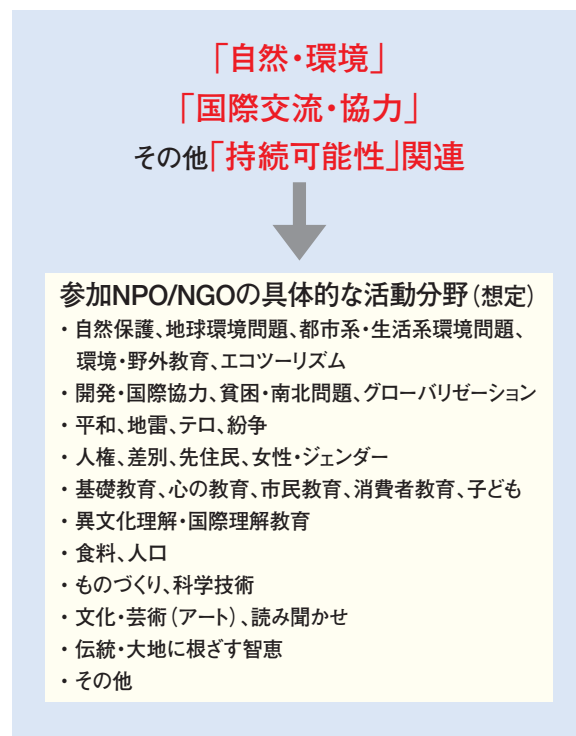
国内外のNPO/NGOと、その活動に共鳴する市民や企業との協働作業によって創られる、楽しくて学びや感動のある参加体験学習の場を目指すために、5つの指針を大切にしています。

- 1 主役は、NPO/NGO [プレゼンテーション]
- 2 舞台を共に創り上げる [コラボレーション]
- 3 参加と交流を大切に [インタラクティブ]
- 4 生成し続ける場づくり [コミュニティビルディング]
- 5 ここから始める、広がる [ネットワーキング]



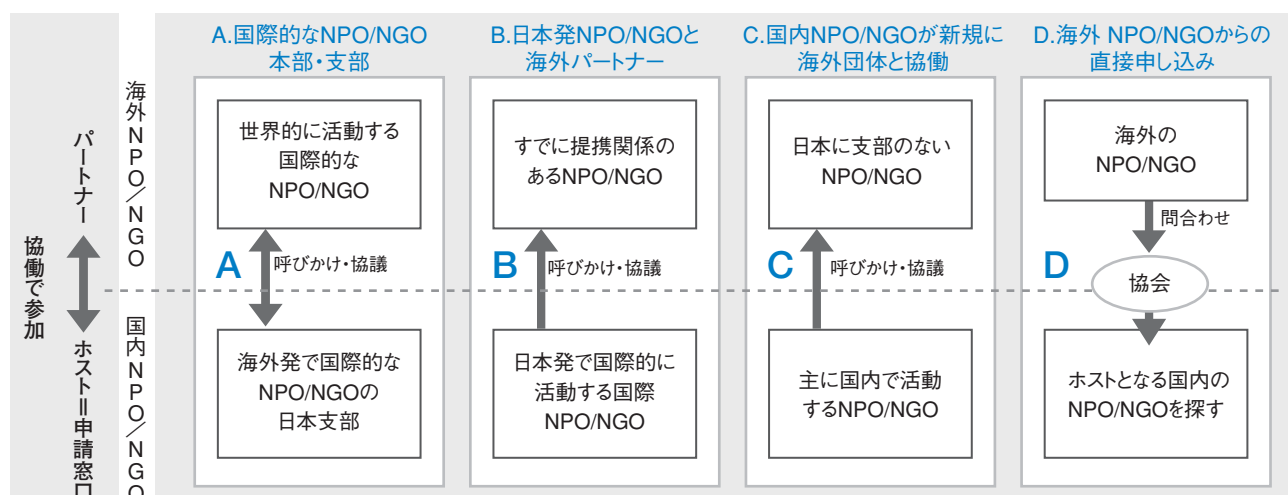
参加NPO/NGOの主要対象分野

愛・地球博のテーマ「自然の叡智」と「地球大交流」、そして「持続可能性への学び」という視点から、参加NPO/NGOの主要対象分野を以下のように想定しています。



NPO/NGOの基本参加パターン

申請窓口となる国内NPO/NGOをホストに、海外NPO/NGOを「パートナー」として協働ユニットで参加していただくことを原則とします。どちらかが複数あるいは双方とも複数となるユニットでの参加も可能です。2003年7月より公募を開始します。



※Cパターンは日本国内NPO/NGOの海外協働先について、また、愛知県及び近隣のNPO/NGOの運営・催事参加等については協会(地球市民村事務局)にご相談下さい。

アドバイザー (敬称略)

阿部 治 [立教大学 教授] / 岡島 成行 [大妻女子大学 教授] / 原 剛 [早稲田大学大学院 教授] /
 ブイ・チ・トルン [(財) 豊田市国際交流協会 事務局長] / 星野 智子 [市民活動コーディネーター] / 星野 昌子 [(特) 日本NPOセンター 代表理事] /
 山崎 唯司 [(特) 国際協力NGOセンター(JANIC) 事務局長] / *2003年7月現在

地球市民村の会場

くつろぎのスローエリア

会場は、長久手会場の「遊びと文化のゾーン」に位置し、愛知国際児童館を記念館を活用する「出会いのゾーン」と屋外広場の「体験と交流のゾーン」で構成されます。

「出会いのゾーン」は、地球市民村のオリエンテーション機能を持ち、「体験と交流のゾーン」では、NPO/NGOによるブース出展やワークショップ、パフォーマンスなどを展開できる多様な空間を創造します。自然の地形を活かし、かつアジアの文化に密接に関わりのある「茶」や「竹」を中心に展開するランドスケープと、自然素材を用いた建築によって、ゆったりとした魅力溢れる環境をつくります。



地球市民村イメージ

「出会いのゾーン」(愛知国際児童館)

地球市民村のインフォメーション機能を持ち、世界に広がるNPO/NGOの活動や、「持続可能性」に向けた様々な取り組みなどをわかりやすく紹介します。

1 ウェルカムコーナー

「地球市民村」に参加する世界のNPO/NGOすべての「ショーケース」(カレドスコープ)が来場者を迎えます。各団体の活動を象徴する具体的な「モノ」を1点集め、アート感覚を活かしたインパクトあるディスプレイで、会期中を通して展示します。

2 テーマシアター (約300人収容)

来場者に、まず初めに地球市民村の概要を理解していただくためのテーマシアターです。世界中で活躍するNPO/NGOの現状や、「持続可能性への学び」を、身近なものになるよう、映像中心で伝えます。

3 パートナーシップコーナー

地球市民村の協賛企業各社の環境対応や、NPO/NGOとのパートナーシップによる社会貢献活動など、持続可能な社会に向けた取り組みを紹介します。

4 国際会議室 (約50名)

同時通訳ブースを備えた国際会議室では、国際的なシンポジウムや会議などを実施できます。来場者向けだけでなく、世界のNPO/NGO同士の交流に活用できます。

5 NPO/NGOオフィス

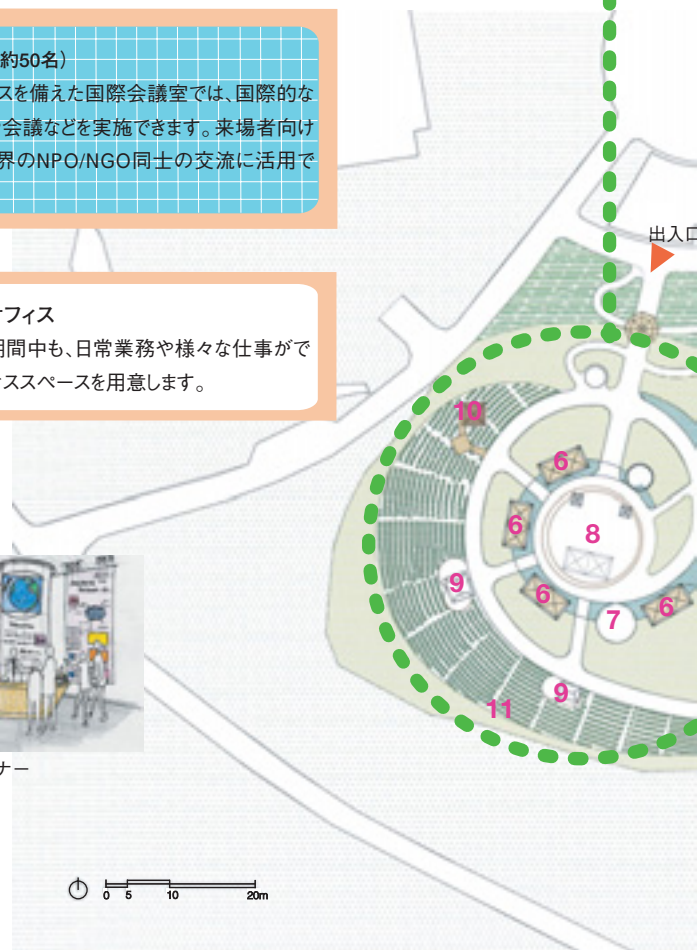
1カ月の参加期間中も、日常業務や様々な仕事ができるようなオフィススペースを用意します。



パートナーシップコーナー

*NPO/NGOのプログラム展開の場 (P07.参照)

- | | | |
|--------|------------|---------|
| 小パビリオン | ワークショップホール | 茶堂・樹上の家 |
| 大地の広場 | 国際会議室 | |



「体験と交流」のゾーン(屋外広場)

参加NPO/NGOと来場者の、そして参加NPO/NGO相互の「人と人との直接的な交流」と、年齢を問わず誰もが楽しめる多彩な「参加体験プログラム」が、豊かな自然環境の中で繰り広げられます。

6 小パビリオン (1団体30㎡、1ユニットで約60㎡)

参加NPO/NGOが、それぞれ自らの活動やプログラムを展示紹介する拠点となるブースです。単なるパネル展示だけではなく、国内外のNPO/NGO関係者が来場者に直に接し、双方向性を大切にしたい参加体験型のプログラムの展開を期待します。



小パビリオン

7 ワークショップホール (約50人収容)

事前申し込みをしていただいた参加者を対象に、落ち着いてワークショップを実施できる専用スペースです。50人規模で、様々な教育プログラムやアートプログラムに活用できます。



ワークショップホール

8 大地の広場 (約300人収容)

小パビリオンに囲まれた、ゾーン中央の多目的催事広場。参加NPO/NGOによる催事で、世界で起きていることを実感できる多彩なプログラムや、主催者催事で賑わいと楽しさを演出します。



大地の広場

9 茶堂 (20~30㎡)

茶畑から収穫したお茶や世界のお茶を飲みながら、語り部の会やミニコンサートなど、小人数での親密な催事が開催できます。



茶堂

11 茶畑

交流やコミュニケーションに欠かせないお茶。早い時期からお茶畑を作り、会期中に何度も収穫して新茶を出すことを検討しています。世界のお茶も楽しめます。

10 樹上の家 (約20㎡)

自然を活かした半屋外のあずまがが樹上に点在します。森の中のような雰囲気、小規模の展示や集いや催事が展開できます。



樹上の家

*イラストはすべてイメージ

NPO/NGO参加概要

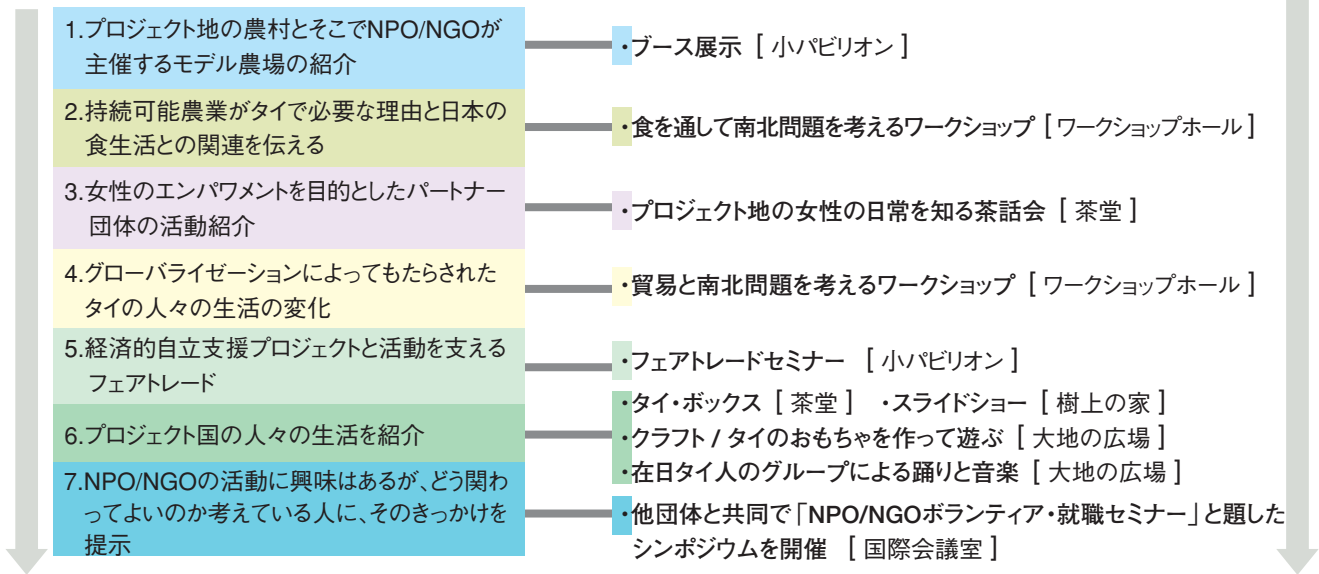
「地球市民村」において、参加NPO/NGOのみなさまには「持続可能性への学び」をコンセプトとした新しいプログラムの構築をしていただきます。

1週間のプログラム展開イメージ

出会いと交流を創り出すための参加体験プログラム例 ータイで活動する国際協力NPO/NGOの場合ー

企画・展開例

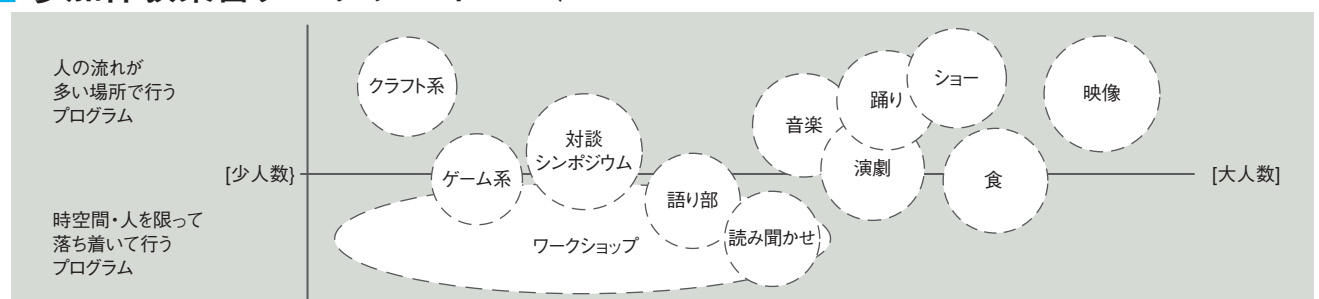
・表現方法 [展開場所]



以上のプログラムを1週間の表にすると

		小パビリオン	ワークショップホール	茶堂・樹上の家	大地の広場	国際会議室
月曜日	午前	・ブース展示				
	午後	・フェアトレードセミナー	・食と南北問題を考える			
火曜日	午前	・ブース展示				
	午後	・フェアトレードセミナー		・茶話会		
水曜日	午前	・ブース展示				
	午後	・フェアトレードセミナー		・タイ・ボックス		
木曜日	午前	・ブース展示	・貿易と南北問題を考える			
	午後	・フェアトレードセミナー		・タイ・ボックス		
金曜日	午前	・ブース展示		・タイ・ボックス		
	午後	・フェアトレードセミナー				
土曜日	午前	・ブース展示				・シンポジウム
	午後	・フェアトレードセミナー			・おもちゃを作ろう	
日曜日	午前	・ブース展示		・スライドショー		
	午後	・フェアトレードセミナー			・歌と踊り	

参加体験学習プログラムイメージ



□ NPO/NGOにとっての意義

1 日頃の活動の拡大・深化に役立つ

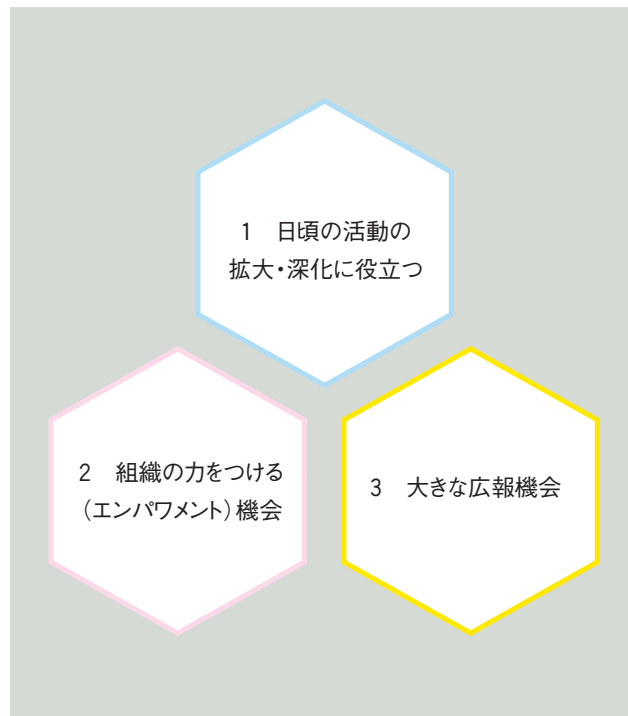
持続可能性を考える教育プログラムが世界から集まるので、相互に学び合うことができます。日頃の活動を見直したり、深化させる機会になるでしょう。この機会に招きたい海外の団体や人を呼んで、コミュニケーションを深めることもできます。また、国内外の団体と協働で、わかりやすく魅力的な参加体験型の教育プログラムを開発し、その後の啓発活動に活かしていくことができます。

2 組織の力をつける(エンパワメント)機会

一般の人々への啓発活動はどの団体にとっても課題でしょう。毎日、多くの来場者と接することは、表現力や説得力を磨くよい機会になるでしょう。2004年には、マーケティング、広報、演出など、アピール力強化のための研修も予定しています。期間中に、他の団体から学ぶ機会も多いと思います。世界の様々なNPO/NGOと交流する中で、国際性を高めることはもちろん、組織の体力をつけ、スタッフの人材育成としても大きな機会になるでしょう。

3 大きな広報機会

1カ月の期間中にスタッフが直接来場者と対面し、親近感を深めながら、多くの人々へ団体や活動への認知や理解を促進する大きな広報機会です。地球市民村だけでも150万～200万人の来場者を見込んでいます。参加期間の1カ月だけでなく、6カ月の全期間を通して、出展団体の紹介を行うコーナーも設けます。



□ 主催者から提供できること

1. 「参加体験学習プログラム」制作等に要する経費の一部を協会が負担
2. マーケティング・企画・広報・情報通信・持続可能性教育・異文化コミュニケーション・ワークショップなどに関する専門家のアドバイス
3. 実施運営サポート
4. 世界から集まるグループ間の交流をサポート
5. オフィススペース
6. 協賛企業とのコラボレーションの機会

□ 参加NPO/NGOに求められること

1. 原則として、1カ月のプログラムの運営とそれに必要なスタッフ
2. ブース出展、ワークショップなどの提供、情報や紹介素材の提供
3. 「持続可能な社会のための参加体験学習プログラム」の創造と提供
4. この機会を利用して団体の活動、事業を深め、さらに社会を変えるアイデアを世に問いたいという意欲

実施運営スタッフの編成

事務局の各分野の専門家と共に、NPO/NGOの出展参加の運営をサポートする若手スタッフを育成し、各参加団体の運営をサポートする体制を整える予定です。

□ スケジュール

2003	
7月	第1ステップ 参加団体決定(03年7月～04年2月)
8月	
9月	公募：7月～11月28日(金)
10月	
11月	
12月	選考・決定・通知：12月
2004	
1月	契約：04年1月～2月
2月	空間・時間配置計画の再検討：04年1月～2月
3月	第2ステップ 出展参加プログラム作り(04年2月～11月)
4月	
5月	*魅力的なプログラム作りのためのプロスタッフとの打合せ
6月	A.現地説明会：2月～3月
7月	B.プログラム基本計画打合せ：3月～5月
8月	C.プログラム実施計画打合せ：6月～8月
9月	D.プログラム運営計画打合せ：9月～11月
10月	
11月	
12月	第3ステップ 実施運営の最終確認(04年12月～05年2月)
2005	
1月	*運営マニュアル、緊急対応マニュアル、広報対応マニュアルの講習と配布
2月	
3月	第4ステップ 地球市民村開催(3月25日～9月25日)
	第5ステップ 事後への継承

EARTH DREAMING 地球の夢

持続可能性への学びをめざして

アドバイザー・プロデューサー

木幡和枝 × 星野昌子 × 星野智子

国際的な活動をしているNPO/NGOが国内と海外のユニットで参加し、計60団体以上が集まる地球市民村。

「国連持続可能な開発のための教育の10年」とも連携し、自然・環境や国際交流・開発協力の分野を軸に、各NPO/NGOが様々な参加体験学習プログラムを展開する。国境を超えた地球の問題を誰もが体感し、持続可能な社会にむけて自然・文化・アートなどから学ぶ感動に出会える空間をどうすればつくれるのか。地球市民村のアドバイザー・プロデューサーである木幡和枝氏が、国際協力に詳しい星野昌子氏と、環境活動を続けてきた星野智子氏の両アドバイザーと「地球の夢」そして、「地球市民村の夢」を語る。

地球の夢とは

木幡 地球市民村は、NPO/NGOと共につくるといふ万博史上、初めての試みです。

事務局 その「地球市民村」にかかげた「地球の夢」というコミュニケーションワードについては、どのようにお考えですか？



「私たちが含む地球の夢を、一緒に見てみたい」

木幡和枝

木幡 「地球」ってどこまでが範囲なのかという問題がありますが、太陽系の一つの惑星である地球と、地球から生まれた動植物、人間、文化も地球の一部であると思います。「地球の夢」とは、夢を見るという無責任な空想ではなく、持続可能な生存の可能性や、地球の生き方を模索してみようということなのです。

NPO/NGOの方々は、平和、交流、文化、人権などの問題に取り組んでいらっしゃいます。しかもそれらの問題は、地球の一部であると思っている方々の集まりでしょう。重要なのは、誰にも言われないのに、自ら選んでそういう場をつくる点です。自己決定ができる新しい人間像が共通して持っている思想や文化を、具体的に感じられる場所にしていければと思います。

星野智子 21世紀に入り、「新しい価値観」がよく言われていますが、未だに成長の限界とか、環境や人口の問題が騒がれつつ、改善されていない状況です。21世紀最初の万博で、過去の反省を提示できる、あるいは気づく場になればいいと思います。環境破壊をやってきた人間という存在を「こうであってはいけない」とプレゼンテーションし、訪れた人が参加、体験できた方がいいですね。

人の意識は、知識や経験を積み重ねてできていきます。なので、万博を通して様々な人が交流をする中で、人の意識を20世紀型から21世紀型

に変えていく。自然と共生して生きていくのが本来の人間のあり方なのだという、ある種新しいのだけれども回顧しているようなところを表現できたらいいなと思っています。NPO/NGOが大事にしてきた、お金では評価できないようなところも、ここでは評価してくれるような、プレゼンテーションができればいいですね。

星野昌子 NGOをやっている、自ら進んで新しい人間像を持っているような人を、特異な存在のようにとらえられてしまうと、日本社会が危ない気もします。国際的に言えば、新しい人間像は、実はそんなに特別ではないのです。活動が、南アフリカでボランティアをするということでもよく、私生活の中や、仕事場での人の輪のつくり方など、何かをやりたい人がやる、やりたくない人は別にやらなくてもいい……そうなることに私は夢をかけています。自分の一生というのは、もっと自主的に判断していいんだというか、そんなことが伝わる、チャンスになればと感じます。

危惧しているのは、日本の中には‘mobilized volunteer’（動員ボランティア）と‘pure volunteer’（純粋ボランティア）の2種類あることです。その状態を当たり前のこととして、若い人たちが語っているのです。「私は動員ボランティアとして何々県の国体に参加しました」と。すると、海外の方々から、「日本社会って？」と言われるのです。それが続いているところがすごく怖いのです。

人は、どんなバックグラウンドでも、自分が持っている何かを発揮して、もっと生き生きと、生きられると思うのです。その行為は、自分以外の人たちに、もっとハッピーになってもらうに役に立っていたりという、どんな人でもそういう喜びを感じる権利があるじゃないですか。



「私の家は地球」

星野昌子

事務局 「地球市民」とは、どう考えるべきでしょうか？

星野(昌) 例えば、SARSの問題。私の教え子にも台湾とか香港など、中国の方が多いんです。すると、生徒の身になって考え、状況がとても気になるのです。私は単純に「私の家は地球」。だから、南アフリカで何かあったら、何かやらなければいけないんじゃないのという、子供っぽけれども、そういう感じかなと思っています。

星野(智) 私の実家も留学生交流や、国際交流をずっとやってきたので、誰でもふらっと来ていました。なので、例えばルワンダに友人がいたら、ルワンダで何か起きたとき、ほんとに親身になってどうしようと考えます。だから、隣人愛というのでしょうか、そういうのが地球規模に拡大している状態だと思っています。「地球市民」という熟語であるとするれば、国民とか県民という枠とは違う、「気づいた人たち」といいますか、自立、自己決定ができる人たちで、グローバルな視野を持っている人と考えています。

木幡 そうですね。国家であるとか、企業であるとかを超えて、自分で地球とともに持続可能な生き方をしよう、自己決定した人々、それが「地球市民」ではないかと思います。

地球市民村の空間

木幡 地球市民村は、それほど広い場所ではなく、国際児童年のときにつくられた児童館があり、既存の建物を利用します。中は展示や会議などができるアクティビティの場です。それ以外は、自然にとけ込み人がゆったりできるような、ちょっとしたシェルターのようなものが幾つかと、周辺には茶畑をつくります。来られた方も、もしかしら制作中のプロセスに入ってきていただくような場を想定しています。茶畑は期間中に3〜4回茶摘みができるので、生命の循環が感じられるような場所になると思います。命の記憶や、地球とのつながりを思い出すことによって、一人一人の記憶や夢は多分勝手に開花してくれるだろうと。

事務局 その中で、どのような活動ができると思いますか？

木幡 各団体が交流しながら、同時に自分たちの活動についても紹介する場やワークショップもあり、これには歌、踊り、物語、映像や、何か

工芸品をつくってみるとか、具体的に自らの手足を動かしたりすることでわかることも含まれています。何となく懐かしいというものに立ち返るきっかけになってほしいと思います。

事務局 「地球の夢」をみんなが思い出すような場づくり、環境を整えようと考えているわけですね。

星野(智) プログラムをやって楽しい、ここに来て遊べるという要素を盛り込んでいければいいですね。自分の好きな分野で気の合う仲間とまず一緒にボランティア活動してみる。楽しいけどその問題の背景には複雑な社会問題があるということを経験を通じて知るなど。私はごみ問題を通じて大量生産の産業構造の問題を伝えるような活動をつくってきました。入り口は楽しいけれども、実際はこんなことがと、若い人はそちらのほうが入りやすいかと思えます。

事務局 万博では、赤ちゃんから年配の方まで幅広い層が来られます。いろいろな世代間の交流や、人の智恵みたいなものが、行き来するようになってほしいです。

星野(昌) 年配者がどんどん増える中、日本のシニアは多少貯金は持っているかもしれないですが、かなり過酷な状況に追いやられている現状も考えたいです。

例えばスウェーデンの老人ホームとの比較を展示しても面白いと思います。スウェーデンの老人ホームでは、愛情は家族からもらいますが、プロの心地良い介護が、大してお金もかからなく行われています。税金をたくさん払ってこられたというバックがあると思うんですけども、こんな老後もあるんだというようなことを紹介する。理想的な老後の生活の一部を紹介できれば、子供が来られない日でも、シニアは見に行くかと思えます。

事務局 持続可能な社会づくりという意味でもありますね。

木幡 プログラムもその意味では、子供向けとか、何とか向けとそんなにはっきりしてなくて、みんなで楽しめればいいですね。

持続可能な社会について

木幡 自然の資源を長い間合理的に運営するには、持続可能性を追求していかなければいけないということが、20世紀後半、人の意識に生まれてきたわけですね。

しかし、「まさしくこれが持続可能性だ」と言い切ってしまったら、もうそれは単なるイデオロギーになってしまうので、「これが」と言い切らないところが持続可能性の秘訣だと思うんです。重要なのは「ホリスティック」つまり、全体的に考えるということでしょうね。自然と人為両方の因果関係ですけれど。

事務局 智子さんは、各地域ミーティングで「持続可能な社会って何?」と、参加者の方々に聞



「未来世代への責任を」 星野智子

かれているようですが、どんなことが論議されているのでしょうか。

星野(智) 今までのスピードアップされた競争社会、お金偏重の社会は持続可能ではないという共通認識は、ありますね。これまでの反省の裏返しをカードなどに書いてみますが、「これが持続可能な社会です」という答えは、いつも出せません。要素としては、優しさ、スローペース、公平性、お金以外の価値などが出ています。

私の考えるところでは、親や子どもという2世代だけの話ではなくて、未来世代—自分が見ないであろう自分の先の世代への責任を考えて社会活動ができるかどうかだと思います。未来世代への責任を要素として考えると、持続可能性というのはおのずと保てるのではないかとは思っています。

事務局 いわゆる途上国に、先進国の人間が行って、学んで帰ってくる人が多いですね。そこら辺にヒントがある気もするのですが。

星野(昌) 国際比較文化だとかを専門に勉強していたような人が、東南アジアなどから戻ってきて、今までの日本の農業じゃなくて、それこそ持続可能な農業に帰っていく例が、最近増えているんです。真剣に既存の農業のあり方と闘いながら自然農法など、埼玉とか茨城とかでやっているんです。私は彼らに共感します。一方で、私は都市も好きで、自分自身のライフスタイルは矛盾に満ちたものだなということを感じながら生きているわけです。でも、矛盾に気がつければ、また大きな流れになって、いい方向に行くんじゃないでしょうか。

木幡 少なくとも今は、環境に関してとりわけ興味を持っている人じゃなくても、ある種の自分たちの矛盾というか、自分たちが決して安全ではないということ、漠然と知っているというのはすごく大きな変化ですよ。

参加の意義

星野(智) 国際万博なので、NPO/NGOにとって国際性を養うチャンスや、あるいは「気づき」というのを持っているのではないかと思います。どの問題もそうですけれども、すべてがつながっていて、日本の環境問題は地球の環境問題であったり。日本の経済活動はまさにアジア、アフリカを壊している

ような状況の中でNPO/NGOの活動自体も国際的なセンスを持っていないと…。例えば、サミットで決まった条約と、自分の生活とをつなげる作業が、大事になってくると思うんです。参加するNPO/NGOにとっては、21世紀はこうあってほしいという、自分たちが信じるコンセプトを伝えるコンセプトリーダーとしてのプレゼンテーションができる場であればと思います。「地球市民村」は、たくさんの思いが詰まっているところですし、ふだんの場所や媒体で言っていたことを、大きな場で言えるところではないでしょうか。

星野(昌) 海外からのNGOの外国人の数は限られているので、地域の外国人のテーマをやっているところと、何かできたらいいですね。JVCでは、OB・OGが離れちゃうと、JVCとのつながり方がわからない。そこで、一種の同窓会のような形で、OB・OGに来てもらい、今日はイラクだ、あしたはパレスチナだと言っているような現役の職員が、そんなに労力を払わずに、ローテーションを組んでやれる、そして久しぶりに楽しめる。おそらく他のNGOにも、OB・OGと現役との壁というのがあるので、そんな壁を壊すいい機会になれば、という希望を持っています。

事務局 持続可能性のための、世代間の交流ですね。

木幡 様々な交流があり、自分たちの魅力を発揮する場と考えていただけたらと思います。

文責(地球市民村事務局)

木幡和枝(こばた かずえ)

アート・プロデューサー。科学環境ジャーナリスト。東京芸術大学先端芸術表現科教授。P.S.1現代美術センター(ニューヨーク)東京代表。主な翻訳書に、ライアル・ワトソン『風の博物誌』(河出文庫)、セオドア・ローザック『地球が語る「宇宙・人間・自然」論』(ダイヤモンド社)など。

星野昌子(ほしの まさこ)

65年、青年海外協力隊の第1期生としてラオスに渡り、80年、日本国際ボランティアセンター(JVC)を創設。国際ボランティアの開拓的な活動と後進育成の功績から、85年に外務大臣表彰(国際技術協力)を、95年に内閣総理大臣表彰(男女共同参画社会づくり功労者)を受賞。かながわ女性センター館長などを歴任後、現在は日本NPOセンター代表理事を務める。外務省改革の現場でも活躍中。

星野智子(ほしの ともこ)

市民活動コーディネーター。日本外国語専門学校非常勤講師(国際ボランティア学科)。「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議設立準備世話人。日本リサイクル運動市民の会、ジャパンエコロジーセンター、環境パートナーシップオフィス、地球環境行動会議(GEA)事務局、(財)水と緑の惑星保全機構、ヨハネスブルグ・サミット提言フォーラムなどの事務局を経て独立。共著に「地球が危ない」。



お問い合わせ先

地球市民村事務局 (株式会社博報堂 愛知万博室内)

〒108-8088 東京都港区芝浦3-4-1

Tel.03-5446-8658 (受付時間 月～金 10:30～17:30)

Fax.03-5446-8790

E-mail info.ngv@hakuhodo.co.jp

財団法人 2005年日本国際博覧会協会

〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-15-1

名古屋ダイヤビルディング2号館4階

Tel.052-569-2634 Fax.052-569-3385

E-mail ngo.gvlg@expo2005.or.jp



このパンフレットの用紙は古紙配合率100%の再生紙を使用しています。
印刷インクには大豆油インクを使用することで環境負荷の低減を図っています。